学校教育目標

日光市に生まれたことを
誇りに思える児童の育成
　〇よく考え学ぶ子
　〇明るく思いやりのある子
　〇進んで体をきたえる子

今市小だより

チーム今小
第６号　令和５年　９月４日
発行者　日光市立今市小学校
校長　　黒　澤　　守

TEL０２８８－２２－００５４
FAX０２８８－２２－００５５

夢や希望を実現する学校

今は亡き、本校の卒業生でもある吉野ミツヱさんは、若い頃、東京大空襲を経験され、空襲を逃げ惑った体験を持っていたそうです。生前、断片的にその体験を家族に話すことはあったとのことですが、多くを語ることはしませんでした。それは、話すことによって空襲の場面がありありと思い出され、苦しくなってしまうからだそうです。

しかし、悲惨な戦争を繰り返さないためにも、体験したことは重要と思い、体験したことを書いてほしいと多少無理をいって家族から頼んだら、やっと書いてくれたので、子供たちをはじめ、多くの方々に紹介したいということで、御子息から原稿をいただきました。

是非、御家族で御一読いただき、戦争のない平和な世の中の大切さ、ありがたさについて考える機会の一助になればと思います。

東京大空襲

吉野ミツヱ

東京に就職

昭和１９年４月、私が１５歳になって尋常高等小学校高等２年を卒業し、少しでも国のためになろうと思って、東京亀戸にあった東京無線株式会社に就職することになりました。国鉄今市駅から父に見送られて出発、小山駅で全国から集合した人たちと合流しました。今市駅で別れたと思っていた父の姿が小山駅のホームに見えたときは、私の胸にジンと熱いものを感じました。この戦争の真最中に娘を東京に出すのだから父も心配だったのでしょう。

小山駅から就職列車に乗って上野駅まで行き、亀戸にある東京無線に入社しました。それから二十日くらいは各職場を見学して歩きましたが、寮に帰るとホームシックになり、みんなそろって泣いたことも何回かありました。そのうち職場が決まり、私は卓上旋盤で働くことになりました。それまで職場は、男の人たちばかりで大きな旋盤を動かしていましたが、職場に初めて女性が入ったので男の人たちはとても歓迎してくれました。

だんだん慣れてきて職場は厳しいけれど楽しくなってきました。東京に行ってから毎月故郷から面会に来てもらうのもまた楽しみでした。休みの時などは友達と３、４人で、亀戸天神様に行って遊びました。浅草の仲見世に行き色とりどりの飾り物や洋服を見たとき、おとぎの国にでも迷い込んだような気がしました。また、亀戸の町を駅の方まで歩いて菓子店に寄ったとき、「お姉ちゃんたち、何県から来たの。」と聞かれたので、「栃木県からです。」と言うと、店のおばさんに「私も栃木県なんだよ。」と言われて話が弾んだりしたこともありました。

激しくなる空襲

そうこうしているうちに７月になり、その頃から警戒警報が出るようになりました。８月には次第にその数が多くなり、その都度、防空壕に入るようになりました。私たちの寮の所にある防空壕は立派な頑丈そうなものでしたが、工場の中庭にある防空壕は見るからに粗末ですぐに崩れそうな壕でした。

１２月になると空襲が激しくなってきました。ある夜、本所・深川が空襲されましたが、Ｂ２９が落とす焼夷弾が赤い風船のようにきれいで、ずっと見ていたこともありました。まだこのころは空襲を他人事のように思っていたのです。

１２月末の夜中の１０時頃、警戒警報発令の放送があったので、廊下に並んで点呼をとっていると、Ｂ２９のゴーという物凄い音がしました。そして突然爆発音とともに大地が揺れて、大きい石や無数の砂が降ってきました。私たちは急いで部屋に入り、布団に頭を突っ込みました。経験したことのない出来事で、怖くてしばらくそのままにしていました。

そのうち夜が明けてきたので外に出てみると、寮の一番後ろにあった講堂が跡形もなく消えており、直径３０メートルくらいの穴があいて青い水が溜まっていました。講堂にあったミシン２０～３０台や、その他いろいろな道具もなくなってしまいました。講堂には月に一度、慰問団が来てくれていたので寂しくなってしまいました。あたり一面に大小の石が飛び散っているので、そのとき初めて爆弾が落ちたことがわかりました。爆風で寮がいくらか破壊されましたが、けが人が一人も出なかったことが幸いでした。

その後職場では、午後４時になると日の丸に「神風」と書いた鉢巻をして働くことになりました。空襲はさらに激しくなり、毎日のようにありました。Ｂ２９が空高く不気味な音をたてて何機も飛んできました。透き通るような鉛色のＢ２９を迎え撃つ日本の飛行機は、豆粒くらいでした。夜の空襲でＢ２９をめがけて照明弾を撃っても高く飛んでいるので当たりませんでした。

ー裏面に続きますー

燃えた工場

１月になると、私たちのいる下町の方に空襲が近づいてきて、毎日毎晩、爆弾や焼夷弾を落としてきました。その都度私たちは身支度をして、防空頭巾を被り、救急袋を下げて防空壕に入りました。そして３月９日の夜、午後１０時頃空襲警報発令があったので廊下に出て点呼をとり、防空壕に駆け込みました。Ｂ２９が不気味な音を立てて飛んできて、大量の焼夷弾を落としてきました。下町全体が火の海になって風がおき一瞬にして燃えてしまいました。私たちは工場の広場に防空頭巾と救急袋だけを持って集まっていましたが火の粉が飛んでくるので、池の水を手で被り、しゃがんだり伏せたりしていました。

そのうちに東の空が白々してきましたが、まだそのときは燃え盛る炎であたりは真っ赤、工場の中は燃えてしまい壁だけしか残っていませんでした。その壁がいつ倒れるかわからないので、工場の前の道路に避難しました。その先に大きな川があったので、見てみるとびっくりしてしまいました。川に浮かぶイカダの上に、黒焦げになって焼死している人が何人もいたのです。初めて見る無残な光景に思わず足がすくんでしまいました。真冬だけれど、無我夢中で寒いなどと感じませんでした。

夜勤の友達は帰ってこない、亡くなってしまったのでしょうか。胸の中は張り裂けそうで、辛い悲しい思いでいっぱいでした。また、私たちの一年間住んでいた寮が焼け落ちたのを見たときは、皆で大声をあげて泣いてしまいました。「故郷にいる父ちゃん母ちゃん本当に寂しくて悲しいよ。」と叫んで号泣して、涙もなくなるほど泣きました。今考えてみると、まだ１５歳の子供だったのです。

地獄の中の彷徨

３月１０日の朝７時か８時頃だったと思います。どこからかおにぎりが届いたので、立ち食いしていましたが、兵隊さんの指揮で浅草の方に歩いていくことになりました。途中は見渡す限り焼け野原。見上げると空は煙で真っ暗、太陽が真っ赤に見えました。

歩いているうちに、真っ黒に焼け焦げた人たちがそこらじゅうにごろごろと倒れていました。歩くのが一生懸命で、いつしか焼け死んだ人を見るのも慣れてきて、怖さを感じなくなっていました。しかし、道端に黒焦げになってうつぶせになって倒れている、たぶんお母さんだと思う人が、胸の中に小さな子を抱いている姿を見たときは、また大きい声を出して泣いてしまいました。本当に地獄の中を歩いているようでした。

また、歩いているうちに上野あたりで暗くなって夜になりました。焼け野原にぽつんと建っていた学校らしいところで一夜を明かしました。朝になると、やはりどこからかおにぎりが届いていたので、水を飲みながら食べました。上野駅からは焼け爛れた椅子もない電車に乗って、大森の分工場に行き、またおにぎりをいただきました。

死ぬかと思った爆撃

分工場から３０分くらい歩いたところに空いた寮があったので、その寮に入りお世話になることにしました。そこで毎日３回おにぎりだけを食べて暮らしていましたが、何もすることがなく、毎日３０分の道を歩いておにぎりをもらってくるのが一日の仕事でした。二十日ほど経って、もうそこにいるのもいやになってしまい、逃げ出すことも考えました。それが寮長さんにわかってしまい、厳しく注意されました。

ようやく４月４日に故郷に帰ることが決まりました。今日まで生きてこられて、明日家に帰ることができると思うと、本当にうれしかったです。しかし、３日の晩に私たちのところが空襲に襲われました。Ｂ２９が低空で照明弾を落とすと真昼間のようになりました。そこに焼夷弾や爆弾を落とされたときは、ものすごい地響きで、大地が揺れ、私たちが入った壕も爆撃されるのかと思って、「神様助けて。」と拝んでしまいました。今度こそは本当に死ぬかと思いました。

運良く私たちの入った壕は爆撃されず、４日の朝がきました。大森の分工場にお世話になったお礼を言って、大森駅から電車に乗りました。しかし、それからどのようにして今市駅まで帰ってきたか、無我夢中で覚えていません。今市に帰ったとき、みぞれが降っていたことをよく覚えています。夜勤で帰れなかった友達はどうなったのでしょう。それを思うと今でも心配でなりません。

もう二度と残虐で悲しい戦争などはしてほしくないです。